追加講　論理的文章の読解⑨

Step 1

一　次の文章を読み、問い(1)～(8)に答えよ。

生きていればなにかしらのすれ違いやトラブルもあるし、その際、心がチクリと痛むことがたまにある。傷つけるつもりはなくとも人を傷つけてしまったり、親切でしたこと、あるいは義務としてやったことなどが逆恨みされてしまうなど、まったく世の中は[a]ままならないものである。とりわけ、異なる価値観や立場の人が相手である場合、いかにこちらが言葉を届けようとしてもうまく届かないこともある。人とうまくやっていくというのは——他人を分かること、自分を分かってもらうことなどは——本当に難しい。できれば、[b]そうした痛みを受けることなく、平穏に、うまくやれる喜びだけを感じて生きてゆきたいものである。

ただ、そうした「痛み」が無駄なもの、*忌むべきものかといえば、必ずしもそういうわけではないように思われる。なぜなら、それは「分かりたかった」「分かってほしかった」という自分の心の在り方を示すものであり、たとえその心の在り方ゆえに、ちょっとしたことで他者との関係上苦痛を感じるとしても、それは自身にとってその関係が重要だからそうなのであって、だからこそやはりその痛みはそのことを知らせてくれるという点で価値があるのだ。ただし、気をつけるべきポイントがここにはある。たとえば、あなたにとってそうした痛みの意味が「ある」のではなく[c]「あった」にすぎないものだとすれば、それはあなたとその人との関係性の限界がそこまでであることを示していることになる。もし、その限界を超えようと思うのであれば、まずはその痛みをきちんと痛みとして認めつつ、相手の重要性と自身の願いを自覚し、そのうえで、「自身がどうすべきか」を問い直す必要があるだろう。これをすることなく、「結局分かり合えないんだよね、人って[d]しょせんそんなものだから」と言ってしまえば、たしかに痛みから逃れて楽にはなれるのだが、それは実際に心が痛んだというその事実を過小評価するようなものである。別に学問に限らず、恋愛関係や友人関係などにおいても、一

度は自身のそうした心の痛みにきちんと向き合い、そこでなにをどうすべきか真剣に考えてみてもよいのではないだろうか。もちろんその結果、相手と距離をとることもあるだろうが、しかしそれでも「あいつは人として間違っている」とか「あいつがいなくなれば世の中がもっと良くなるはずだ」などといった憎悪や偏見に<u>e陥る</u>必要はない。

普段当たり前と信じていることを問い直し、自分自身が正しいかどうか、あるいは自身がなにをすべきかをその理由に<u>f遡って</u>考えることは、こうしたことと似ている。うまく生きられないとき、あるいは、<u>gうまく生きて</u>いながらもどこか心が痛んだりモヤモヤするとき、あなたは「今のあなたの認識」の限界ライン近くにいるといってもよい。その痛みに耐えながらも、世界のさらなる価値を信じ、それまでの限界を乗り越えたとき、あなたにとっての世界は拡がってゆくだろう。それは、価値観が豊かになり、他人をより良く理解することにもつながるのだが、そのためにはまず自身と向き合う必要がある。*本書で紹介した議論には、われわれの心にチクリと痛みを与えかねないような「理由の問いかけ」や「或る種の答え方（という応え方）」がたくさん含まれている。「ルールをただ守ればそれでいいと思っていないか？」「自分は善を知っている、となぜいえるのか？」「環境開発の恩恵と引き換えに、自然破壊に<u>h加タン</u>しているのではないか？」「動物に対してひどいことをしていないか？」「強者である自分たちの利益のために、生命というそれ自体価値あるものを利用してはいないか？」と問われ、それに真剣に向き合うとすれば、おそらく多くの人が心にチクリとした痛みを感じるだろう。そして、そこから導かれたなんらかの答えは或る人にとっては安らぎを、そして別の人にとってはやはり痛みを与えるものとなるかもしれない。

そうした痛みから逃れる手っ取り早い方法は、それを問いかける側の理屈になんらかの欠点・難点があることを指摘したり、あるいは、問いかける理論を駆使する人に対して「人でなし」「頭でっかち」「世間知らず」「*原理主義者」「差別主義者」などのレッテルを一方的に貼りつけてその言説を無効化しようとするものである。そして、「こちらが問われるべきことなどないんだ」と安心感に浸ることでその痛みを回避できるわけだ。ただし、<u>iそれ</u>は前述の、他人とうまくやりたいけどやれないとき、その痛みから逃れるために、自分自身を問い直すことなくそのうまくいかなさを自分以外のせいにすることにも似ている。そうやって世界に対する自分の関わり方の可能性をそこで閉じてしまうことが**一度しか与えられていない、そして、かけがえがなく取り戻すことのできない有限な時間に生きる自分自身の人生**として本当にふさわしいのだろうか。やはりそのことはきちんと考えてみたほうがよい。

（中村隆文「『正しさ』の理由」による）

注
＊忌む…好ましくないものとして避ける。
＊本書で紹介した議論…本文より前の部分で、倫理的な問題について様々な説を踏まえて筆者の意見が述べられている。
＊原理主義者…特定の理念や原則に基づくことを厳格に守る人。

(1) 本文中の a ままならない の意味として最も適当なものを、次のⅠ群ア～エから一つ選べ。また、本文中の d しょせん の意味として最も適当なものを、後のⅡ群カ～ケから一つ選べ。

Ⅰ群
ア 責任がとれない　イ いつも変わらない
ウ 心が休まらない　エ 思いどおりにいかない

Ⅱ群
カ 落ち着くところは　キ 長期的に捉えると
ク 悲しいくらいに　ケ 広い意味では

a □　d □

(2) 本文中の b そうした痛み は、何によって引き起こされるものか。最も適当なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 他者と自分の価値観に相違がないこと。
イ 他者や自分の気持ちを損なうような交流がないこと。
ウ 他者に対する考えが自分の中で変化すること。
エ 他者と自分が意思疎通をする中で食い違いが生じること。

□

(3) 次の文は、本文中のc「あった」にすぎないものだとすればに関して述べたものである。文中の□に入る表現として最も適当なものを、後のア～エから一つ選べ。

痛みの意味が「あった」にすぎないものだとすることは、その人との関係がそれ以上にはならないことを示しており、痛みを認め、□とすべきところを、しなかった状態を指している。

ア　自分が求めることと相手の重要性を確認し、相手の振る舞いを見直そう
イ　自分の行動や相手が重要であることを再確認し、相手の願望をかなえよう
ウ　相手の重要性を認識し、自分の思いを踏まえて適切な行動を検討しよう
エ　相手が重要でも、関係を希薄にすることによって自分の痛みを退けよう

□

(4) 本文中のe陥るとf遡っての漢字の部分の読みをそれぞれ平仮名で書け。

e □る　f □って

(5) 本文中のgうまく生きては、二つの文節に区切ることができる。この文節どうしの関係として最も適当なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア　修飾・被修飾の関係　イ　補助の関係
ウ　主語・述語の関係　エ　並立の関係

□

(6) 本文中のh加タンの片仮名の部分を漢字に直し、楷書で書け。

加□

(7) 本文中のiそれの指す内容として最も適当なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 問いに対する答えが多様であると指摘し、たとえ真剣に臨んだとしても自分一人で問いを解決することはできないと思うことで痛みを回避すること。

イ 問いの不完全さを示したり、問う者を非難したりして問いとしての意味を失わせて、自分が向き合うべきことはないと思うことで痛みを回避すること。

ウ 問う者に一方的な評価を加えるために、論理の矛盾点を指摘して問いを破綻させ、自分が問われるべき理由はないのだと思うことで痛みを回避すること。

エ 問いが難解だと指摘したり、問う者を追及して真意を解明したりして、問いが自分を非難するものとして不十分だと思うことで痛みを回避すること。

(8) 次の会話文は、仁さんと唯さんが本文を学習した後、本文について話し合ったものの一部である。これを読み、後の問い㈠・㈡に答えよ。

仁　本文では、「痛み」を感じることは悪くはないと述べられているよ。

唯　そうだね。他者との関係の重要性ゆえに私たちは痛みを感じるし、その痛みは、自分が他者に対して相互理解を求めていた［A］だから、私たちにとって有用だとも言えるんだね。

仁　うん。痛みから逃げず、自分を問い直すことは、「世界に対する自分の関わり方の可能性」が開かれることになると本文から読み取れるね。

唯　つまり、自分の世界は、今の自分が持つ［B］によって大きくなり、そのことがものの見方を多様化して［C］を深めることも可能にするんだね。そうして自分自身の人生をより良いものにしていくことが、私たちにとって適当なことなのではないかと筆者は述べているよ。

㈠ 会話文中の［A］に入る最も適当な表現を、本文中から十字で抜き出して書け。

□□□□□□□□□□

㈡ 会話文中の［B］・［C］に入る適当な表現を、本文の内容を踏まえて、［B］は十字以上、十三字以内で、［C］は四字以上、八字以内で書け。

B［　　］によって大きくなり、そのことがものの見方を多様化して

C［　　］。

B □□□□□□□□□□□□□

C □□□□□□□□

【京都府】

Step 2

二　次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

働きアリは自分たちの巣を守るためだけに、エサの採集、女王が生む子どもたちの育児、そして敵の襲来に対する防御などを行います。自分に与えられた使命を、生涯をかけて果たすように遺伝子によってプログラミングされているのです。

働きアリにとっては①そうした生き方こそが自分の遺伝子を共有する姉妹たちの生存率を上げることになり、ひいては働きアリの持つ遺伝子が次の世代に残る確率を最大化することにつながるようにできているのです。こうしたアリの徹底した社会システムを「真社会性」といいます。

ダーウィンの「自然選択説*」に基づけば、真社会性昆虫の巣では、全員が否(いや)が応でも働き者になるはずです。もし、少しでも「怠け者」が出てくれば、ほかの巣とエサや住処(すみか)をめぐる競争で負けてしまいます。だから「怠け者」の存在する余地なんて「理論上は」寸分もないことになります。

しかし、②事実は理論より奇なり。実際にアリの巣を観察していると、ほかの働きアリがせっせと働いているのを尻目に、1日中、なにもしないで巣穴でゴロゴロして過ごす「怠け者」が存在することがわかったのです。怠け者といえどエサは必要ですから、彼らもちゃんとエサだけは食べます。まさに無駄飯食いです。こんな働きアリが巣に居候(いそうろう)されたのでは、全個体が働き者という巣が別に存在したら、その巣に競争で負けてしまい、子孫を残すことが難しくなります。なので「怠け者」を作り出す遺伝子は自然界からは淘汰(とうた)*されて消滅してしまうはずです。

ところが怠け者にもちゃんと存在意義があったのです。この怠け者がいる巣から、働き者のアリを除去してみると、今まで怠けていたアリたちが働き者に変化して、せっせと働き出すことがわかったのです。どうやらこの「怠け者」たちは、労働量が不足する事態が発生したときに巣全体の労働量を補填*するための予備軍らしいということがわかりました。もし、予備軍がなく、巣全体で100%の

労働パフォーマンスを発揮し続けていたら、不測の事態が生じたときにパンクしてしまうことになるでしょう。アリの巣は最初からこの不測の事態を織り込み済みで、常に怠け者が生じるように遺伝的にプログラミングされているのです。

怠け者を「予備軍」と読み替えるだけで、みなさんの中でも、その存在に対する印象がガラリと変わると思います。結局「怠け者」という*レッテルは人間の③先入観がもたらしたものにすぎず、実際には彼らは働かずにじっと力を蓄えて待機する、という「仕事」をしているのです。

（五箇公一（ごかこういち）「これからの時代を生き抜くための生物学入門」による）

【文章Ⅱ】

アメリカの生態学者ティルマンは、草原に生える草の種類をコントロールする実験を行った。その結果、生物多様性が高くなると生産性が高まり、少々の環境変化があっても安定していることが分かったのである。単純に考えると、草原にもっとも成長スピードの速い草を一種類だけ植えることが、いちばん生産性の高い土地の利用法であると思ってしまうかもしれない。しかし現実はそうじゃなくて、種類がたくさんあったほうが、草原全体の生産性が高くなったのである。

草原の草は一見どれもおなじように見えるが、それぞれの性質は微妙に異なっている。そして、草原はどこもおなじように見えても、実は環境が微妙に異なっている。平坦（へいたん）な草原に見えても、きちんと調べれば土地にちょっとした起伏があることが分かるだろう。草原に雨が降って、その水が流れていく。長年のこのような過程が土を少しずつ削り、起伏が生まれるのである。すると、草原のなかに、少しだけ湿った場所や、少しだけ乾いた場所が生じるだろう。草は種類によって、湿った場所が得意なもの、逆に乾いていて日当たりの良い場所を好むものがある。草の多様性が高いと、草原内のいろんな環境にぴったりマッチした草が生えてくるので全体として生産性が高くなるのである。

④生物多様性が高いメリットはほかにもある。生態系にはいろんな突発的な出来事が起こる。たとえば、雨が少なくて干ばつが生じる年があるかもしれない。逆に、雨が多すぎて草原が水びたしになる年もあるかもしれない。そんなとき、干ばつに弱い草や、水びたしに弱い草は枯れてしまうかもしれない。生物多様性が高ければ、その場所に干ばつに強い草、水びたしに強い草が生えることが可能

だから、突発的な出来事が生じても、草原全体は安定するのだ。さらに、ある種の病気が流行したときに、草の種類が一種類だけなら草原の全体が枯れてしまう。草の種類が複数あることで、草原全体に及ぶ病気の影響が最小限にとどめられるのだ。ここで学んだように、⑤一見無駄なように思えてもいざというときに役立つという性質を冗長性という。冗長性を高めるため、僕らは生物多様性を守らなければならないのである。

（伊勢武史（いせたけし）「２０５０年の地球を予測する」による）

注

＊自然選択説…生存に有利な形質を持つものが生き残り、適応しないものは滅びるという、ダーウィン提唱の進化論。
＊淘汰…ここでは、外界に適応しないものとして滅びること。
＊補填…不足分を補って埋めること。
＊レッテル…ここでは、ある人物や物事に対する一方的な評価のこと。

問一　【文章Ⅰ】の本文中に「①そうした生き方」とありますが、このことを説明したものとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　生涯をかけて、自分たちの巣を守るためだけに行動し続ける生き方。
イ　生涯をかけて自分の使命を理解し、徐々に任務を果たしていく生き方。
ウ　生涯にわたり、女王が生む子どもに、エサの採集方法を教える生き方。
エ　生涯にわたり、巣を守るよりも自分の遺伝子を残そうとする生き方。

問二　【文章Ⅰ】の本文中に「②事実は理論より奇なり。」とありますが、次の文は、このことを説明したものです。□にあてはまる適切な表現を考えて、十五字以内で答えなさい。

ダーウィンの「自然選択説」の理論に基づけば、真社会性昆虫の巣では、エサや住処をめぐる競争に勝つために全員が働き者になるはずだが、不思議なことに、□という事実が見つかったこと。

問三　【文章Ⅰ】の本文中に「③先入観」とありますが、次の対話は、このことについて【文章Ⅱ】と比べて話し合ったものです。□にあてはまる言葉を、【文章Ⅱ】の本文中から八字でそのまま抜き出して答えなさい。

〈Xさん〉　【文章Ⅰ】でいう「先入観」は、人間があらかじめ持ってしまっている、働きアリに対する一方的な見方のことだよね。
〈Yさん〉　そうだね。そして【文章Ⅱ】の本文中にも、この「先入観」と類似する、人間のものの見方が例示されているよ。
〈Xさん〉　確かにそうだね。【文章Ⅱ】の、草原に生える草の種類をコントロールする実験の例では、「単純に考えると」という表現が用いられ、一番生産性の高い土地の利用法は、最も成長速度の速い草を□ことだと思われやすいと書かれているよ。
〈Yさん〉　二つの文章中に現れた、人間のものの見方には、似通ったところがあるんだね。

問四　【文章Ⅱ】の本文中に「④生物多様性が高いメリット」とありますが、次の文は、このことについて、筆者が述べていることを説明したものです。あとの㈠、㈡の問いに答えなさい。

生物多様性が高いことで、草原内の［A］に適合した草が生えてくるため、草原全体としての生産性は高くなる。また、生物多様性が高いと、［B］ことにもなる。

㈠　［A］にあてはまる言葉を、【文章Ⅱ】の本文中から六字でそのまま抜き出して答えなさい。

㈡　［B］にあてはまる表現として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　病気の流行は起こりやすくなるが、一方で気象の変化には強い草が生き残る
イ　草原は不安定になるが、極端な環境の変化や病気の流行が起きたときには逆に安定する
ウ　極端な環境の変化が起きたあとには、より病気に強い種類の草が生まれる
エ　極端な環境の変化や病気の流行が起きたときに、草原全体が被る影響を最小限に抑える

［　　］

問五　【文章Ⅱ】の本文中に「⑤一見無駄なように思えてもいざというときに役立つという性質を冗長性という。」とありますが、【文章Ⅰ】の本文中にも、この「冗長性」が現れている事例があります。その事例の内容を、五十字以内で説明しなさい。

（50字分の解答欄）

【宮城県】

Step 3

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたしたちが見たり聞いたりしたものを言葉で表そうとして、うまくいかないという経験は多くの方がもっておられるのではないでしょうか。たとえばわたしたちは自分の気持ちを「はればれとした」とか「うきうきした」といったことばで言い表したり、お茶の味を「まろやかな」とか、「うまみがある」といったことばで表現したりします。しかしそのような表現で、自分の実際の感情や、お茶の味を十分に言い表すことができるでしょうか。たとえば「まろやかな」という表現を、「味が穏やかで口あたりがよい、そして深い味わいが感じられる」といった言葉で説明することはできます。しかしその「深い味わい」がどのような味わいなのかをさらに説明しようとすると、言葉に窮することになります。（第一段落）

言葉は、たしかに、わたしたちが経験するものの一面を言い表し、他の人に伝えます。しかしそれはわたしたちが実際に経験していることの一部でしかありません。言葉による表現は、経験の具体的な内容をある断面で切り、その一断面で経験全体を代表させることに喩（たと）えられるかもしれません。その一断面からあらためて経験の全体を眺めたとき、両者のあいだに大きな隔たりがあります。そのあいだには無限な距離があると言ってもよいでしょう。（第二段落）

1「言葉」の語源は、「言の端（は）」であったと言われます。古くは「事」と「言」とは通じるものと考えられていました（言葉には、そのなかで言われているものを具体化する霊的な力が宿っているという、いわゆる言霊（ことだま）思想はそこから生まれたものでした）。しかしやがて「事」と「言」とは同じではないということに人々は気づくようになりました。言葉は「事＝言」として事柄全体を言い表したものではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎないということが意識されるようになったのです。そのために「言の端」という言い方がされるようになったのだと考えられています。（第三段落）

言葉がそのまま経験であるとは言えないのは、それがわたしたちの具体的な経験を普遍的な概念によってひとくくりにしてしまうことと関わっています。たとえば桔梗（ききょう）[注1]の青、露草[注2]の青、都忘れ[注3]の青、それぞれの青は独特の色合いをもっていますが、言葉はその違いを無視して、それらすべてを同じ「青」ということばで表現してしまいます。そのことによって、個々のものがもっていた微妙な差異は一挙に背後に退いてしまいます。（第四段落）

言葉は、それぞれ独自のニュアンス[注4]をもっていたものを、既成の2枠組み、言わば鋳型のなかに押し込んでいくという役割を果たしていると言ってもよいかもしれません。わたしたちがそのときどきに抱く感情も、決して一つのことばで表現できるような単純なものではなく、さまざまな相[注5]がそこには絡（から）まりあっています。また固定したものではなく、大きな振幅をもちながら、止（や）むことなく動いていきます。言葉はその動きの振幅を削りとって、それをたとえば「悲しい」とか「寂しい」といった一つのことばで表現するわけですが、そのことによって感情のもっともいきいきとした部分がことばの影に隠れてしまうのではないでしょうか。（第五段落）

言葉によってわたしたちは多くのことを知り、多くのことを考えるわけですが、そこには制約もまたあるように思います。枠組みのなかに入らないものはとらえることができないわけですし、その枠組みに取り込まれたものは、その枠組みにあうように変形させられてしまいます。これは、言葉にどこまでもつきまとう根本的な制約であると言ってよいでしょう。それだけでなく、言葉は、この枠組みでとらえられたものが、もの自体であり、ものごとはそれによって正確にとらえられているという意識を、それを使う人のなかに生みだします。言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗りこえることができないのでしょうか。（第六段落）

言葉にはまず、ものをグループ分けする働き、つまりカテゴリー化する働きがあります。そこでは、いま目の前にしているリンゴ、たとえば紅玉[注6]の独特の赤い色とか、それ特有の甘酸（ず）っぱい味、あるいはそれが私の好みであるとかいったことは問題にされません。むしろリンゴに共通の性質ですべてのものをひとくくりにすることがその場合の唯一の関心事です。しかし、たとえば友人に「紅玉はおいしいよね」と語ったとき、この「紅玉」ということばは、その基礎的な意味を相手に伝えるだけでなく、相手がその味を知っている

場合には、その人のなかに、紅玉独特の強い酸味のきいた甘さをありありとイメージさせることができます。それを言葉の喚起機能と呼んでよいと思いますが、わたしたちは「紅玉」ということばを聞いたとき、その音声越しに基礎的な意味を聞くだけでなく、さらにその意味を越えて、このことばがもつ豊かな意味あいをも聞くことができるのです。ここに鍵がありそうです。（第七段落）

たしかに、わたしたちはいくらことばを重ねても、紅玉の微妙な味をことばで表現し尽くすことはできません。そこに言葉の限界があります。しかし他方、いま言った機能によって、その味を直接相手のなかに喚起することができます。そのような働きがあるからこそ、3わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになるのだと言えるのではないでしょうか。（第八段落）

（藤田正勝「はじめての哲学」より）

注1・2・3　いずれも植物の名称。　注4　微妙な意味あい。　注5　状態。　注6　リンゴの品種。

1　次のア～オは、本文で用いられている熟語である。熟語の構成が他と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。

ア　両者　イ　語源　ウ　思想　エ　一端　オ　他方

□

2　「1『言葉』の語源は、『言の端』であった」とあるが、「言の端」という表現は、言葉のどのような特徴を表しているか。最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　ある事柄を表現する言葉は、事柄の一部分のみを切り取って全体を表すことができるという特徴。
イ　ある言葉で表現された事柄は、全体像が切り取られて偽りの形でしか伝わらなくなるという特徴。
ウ　ある一つの言葉は、対応する一つの事柄とだけ通じて他の事柄を表すことができないという特徴。
エ　ある事柄を表している言葉は、事柄の全てではなく限られた一部分のみを表しているという特徴。
オ　ある言葉の語源となった事柄は、言葉が表している意味の一部分にだけ影響しているという特徴。

□

3　次の会話は、「2枠組み」について、授業で話し合ったときの内容の一部である。会話を読み、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

Aさん「既成の枠組みに押し込めるとは、つまりどういうことなのだろうね。」
Bさん「たとえば、ア犬の毛がクリーム色でもチョコレート色でも、茶色の犬という枠組みで表すことがあるということではないかな。」
Cさん「なるほど。様々な犬がいるけれど、イ特定の枠組みに入れられたことで、実際とは違う様子として表現されることもあるという考え方だね。本文から考えるとこういうウ枠組みの中での変化は、言葉で表現する以上は避けられないことのようだね。」
Bさん「それで、エ枠組みに取り込むことが言葉と経験の間に隔たりを生む結果になると言えるのだと思うよ。」
Cさん「それに、オ枠組みにまとめることで、意識的に物事を正確にとらえることができるのではないのかな。」
Aさん「もう一度本文を読んで、筆者の意見を確かめてみようよ。」

(1)　会話文の中の――線をつけた部分が、本文から読み取れる内容と異なるものを、ア～オの中から一つ選びなさい。［　　］

(2)　Aさんは、話し合いのあと、本文の内容について次のようにノートにまとめた。［　　］にあてはまる最も適当な言葉を、第一段落～第四段落の中から十六字でそのまま書き抜きなさい。

○　枠組みに押し込めることの作用とは
(例)「悲しい」ということば
実際には様々な相を持つ悲しさも、「悲しい」ということばで表されるとき、［　　］は無視される。

⇦

独自のニュアンスをもっていたものが枠組みに押し込まれることで、感情のもっともいきいきとした部分がことばの影に隠れる。

4　本文における第六段落の働きとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　言葉の制約について整理して問題提起の形で示し、第七段落以降で言葉の発展的な特徴を述べるための導入とする働き。
イ　言葉の不合理な特徴を複数の具体例の形で示し、第七段落以降で言葉の持つ働きを否定するための導入とする働き。
ウ　言葉の定義に関する意見を抽象化した表現で示し、第七段落以降で言葉の持つ欠点を述べるための導入とする働き。
エ　言葉の意味は使い方で変化することを示し、第七段落以降で言葉の正確な使い方を説明するための導入とする働き。
オ　言葉の働きに関する本文の内容を整理して示し、第七段落以降で言葉の持つ機能をまとめていくための導入とする働き。

5　「3わたしたちの会話は、平板な意味のやりとりに終始せず、いきいきとしたものになる」とあるが、会話を「平板な意味のやりとり」にする言葉の限界と、その限界を乗りこえ会話を「いきいきとしたもの」にする言葉の働きとはどのようなことか。七十字以内で書きなさい。

【福島県】

追加講　論理的文章の読解⑨

Step 1

一

解答

(1) a エ　d カ　(2) エ　(3) ウ　(4) e おちい(る)　f さかのぼ(って)　(5) ア　(6) (加)担　(7) イ

(8) ㈠ 心の在り方を示すもの　㈡ B 認識の限界を乗り越えること(同意可)　C 他者への理解(同意可)

解説

(2) 問題文では「そうした痛み」は何によって引き起こされるものか、を問われている。本文冒頭「心がチクりと痛むこと」と痛みについて書かれているため、その直前「なにかしらのすれ違いやトラブルもある」が根拠となる。

(3) 設問文で空欄を含む文が「痛みを認め、［　］とすべき」とあるため、本文で似た記述がある箇所を探す。傍線部を含む文の次の文が設問文の言い換えとなっている。

(5) 「うまく／生きて」は「うまく」が「生きて」を修飾している。

(7) 傍線部「それ」は、「それ」を含む段落の始まりから「それ」の直前までを指している。「問いかける側の理屈になんらかの欠点・難点があることを指摘」「レッテルを一方的に貼りつけてその言説を無効化」などの内容と合致した選択肢を選ぶ。

(8) ㈠ 会話文で［A］を含む文と似た内容を本文から探す。痛みが有用であることを記述しているのは第二段落。

㈡ 会話文と似た箇所を本文から探し、空欄に当てはまるようにまとめる。会話文「自分の世界は、今の自分が持つ［B］によって大きくなり」と似た箇所は、第三段落の「それまでの限界を乗り越えたとき、あなたにとっての世界は拡がってゆく」である。「それまでの限界」は前の文から「認識」の限界と読み取れる。また、「［C］を深める」と似た内容は第三段落「他人をより良く理解することにもつながる」であり、字数に合うように解答する。

Step 2

二

解答

問一、ア　問二、アリの巣に「怠け者」が存在する（十五字）（同意可）　問三、一種類だけ植える

問四、㈠いろんな環境　㈡エ　問五、一見怠け者に見えるアリが、実は労働量不足の事態に備え、力を蓄えて待機している予備軍だということ。（四十八字）（同意可）

解説

問一、傍線部①「そうした生き方」によって「姉妹たちの生存率を上げる」こと、「遺伝子が次の世代に残る確率を最大化する」ことにつながる。傍線部①「そうした生き方」には指示語があるので直前段落も確認し、内容が合致する選択肢を選ぶ。

問二、全員が働き者になるはずだという「理論」とは異なる「事実」をまとめる。

問三、会話文「草原に生える草の種類をコントロールする実験の例」を【文章Ⅱ】から探す。

問四、傍線部④「生物多様性が高いメリット」は「ほかにもある」とあるため、傍線部④の内容は前の段落から始まっていたことがわかる。⑴は傍線部④より前、⑵は傍線部④の後ろの内容から読み取る。

問五、【文章Ⅰ】の働きアリの話の中から、「『怠け者』たちは、労働量が不足する事態が発生したときに巣全体の労働量を補填するための予備軍」という箇所を「冗長性」の観点からまとめる。

Step 3

三

解答

1、ウ　2、エ　3、⑴オ　⑵個々のものがもっていた微妙な差異　4、ア
5、言葉には実際に経験したことの一部しか伝えられない限界があるが、相手と経験を共有することで豊かな意味あいを伝える働きもあるということ。（同意可）

解説

2、本文の「『事＝言』として事柄全体を言い表したものではなく、そのほんの一端を言い表したものにすぎない」という内容を表した選択肢を選ぶ。
3、⑴はBさんとCさんの発言の内容に該当する本文の内容を探す。アは第四段落、イは第五・六段落、ウは第六段落、エは第二・五段落の内容に該当する。
⑵ノートの□を含む文は第四段落、矢印の左の文は第五段落に対応している。
4、第六段落では言葉の制約や、人によって言葉の捉え方が違うことを示し、最後に「言葉はこの具体的な経験とのあいだにある隔たりを乗りこえることができないのでしょうか。」と問題提起をしている。
5、第二段落と第三段落および第七段落に示される言葉の限界と、第七段落に示される言葉の発展的な特徴をまとめる。